

太い幹に家康の三条を据え、左右の枝に三齋の言葉をつけ加えて「金のなる木」が誕生したのだ。と記しています。

なるほど尤もな条々であり、家康と三齋の処世訓を示しているとするれば、流石だと申さねばなりません。ただ、感心する話してはありますが、両人の掛け合いが上手すぎて、俄かには信じ難いところもありそうで、その真偽のほどは定かではありません。

こんなことも考えられます。家康がまだ三河の一大名だったころ、奉行の一人、本多作左衛門は領民に示した法度が守られないことを知り、高札の言葉を「○○すると、さくざえもんがきるぞ」と、平易なものに替えたのです。すると法を犯すものが一人もでなかったのだそうで、後年、この作左衛門の「一筆啓上。火の用心。お仙泣かすな。馬肥やせ」は、簡明、簡潔な言葉として広く知られるものとなりましたが、家康の取り巻き衆のなかには、徳川の世を永らえさせるためにも、家康を神と崇めさせる多くの逸話が生み出されたでしょう。

から、作左衛門に匹敵するほどの知恵者が、家康のチョットした言葉から「金のなる木」を創作したのかもしれない。

なお、三齋の付け加えた言葉として此処では八条を紹介しましたが、「可勢木」と「ついで乃奈木」の二つが無い六条のものもあり、家康の「よる川程のよ木」を「よる川祢可ふの木」（万、願うの木）としたり、三齋の「ようじようよ木」の「養生」を、「永生」（永遠の生命を得ること）とする画もあり、十一条の「金のなる木」が生まれるまでには、多少の潤色を加えられた可能性もありそうです。

先の由来には、更にこうも付け加えられています。

（この図或人の秘蔵せしを借得て写さしめ梓に寿し（版を起し永く伝える）親しき人にもおくる事となしぬ）
借り物の秘蔵の図を版行したと言うのですから、多くの人の知るところとなり、その絵は浮世絵の題材としても格好のものでもあり、ここに示します一寶齋國盛（二代



コピー① 一寶齋國盛の錦絵
「金のなる木」を題材にした浮世絵（錦絵）は数多く制作されたようです。

目歌川國盛。歌川豊國の門人）の錦絵（コピー①）のような、富士山を遠景として、大黒が笊で小判を担ぎ、千両箱に米俵、金銀貨を藤棚や袋戸棚から溢れさせ、福祿寿が大枚の金額を大福帳に記入し、「木性の人は受けに入る」と、己酉の八月八日の酉の刻が一番好いときだと謳い、そして、この図の中央に家康の「金のなる木」を据え、その枝には小判がたわわに実る多色刷りの錦絵を描いています。

これは正月の縁起物として売りに出されたのか、それらを買求める人たちが後を絶たなかったよう

で、この「金のなる木」を題材にしたものは数え切れず、一方、（ごきげんよ木）（こんきよ木）（いそがし木）（たしなみよ木）のような、類似した語句の図柄を手掛ける絵師も輩出していったことでしょうし、「引き札」や「宝くじ」などでも用いられているのはご存知のとおりです。

さて我々が貨幣蒐集界では、錢幣館・田中啓文師が覆刻された「金のなる木」の錦絵が知られています。それは浮世絵の板元に残存する版木を用い、一部の言葉を改変し